

新修
神戸市史

歴史編Ⅱ

古代・中世



1 南蛮人桜花文蒔絵鞍、後輪に描かれた南蛮人 神戸市立博物館蔵



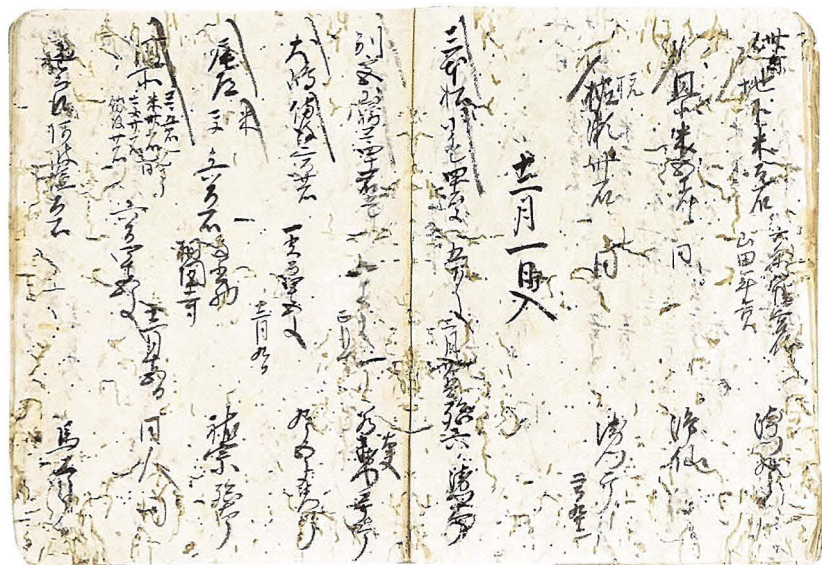
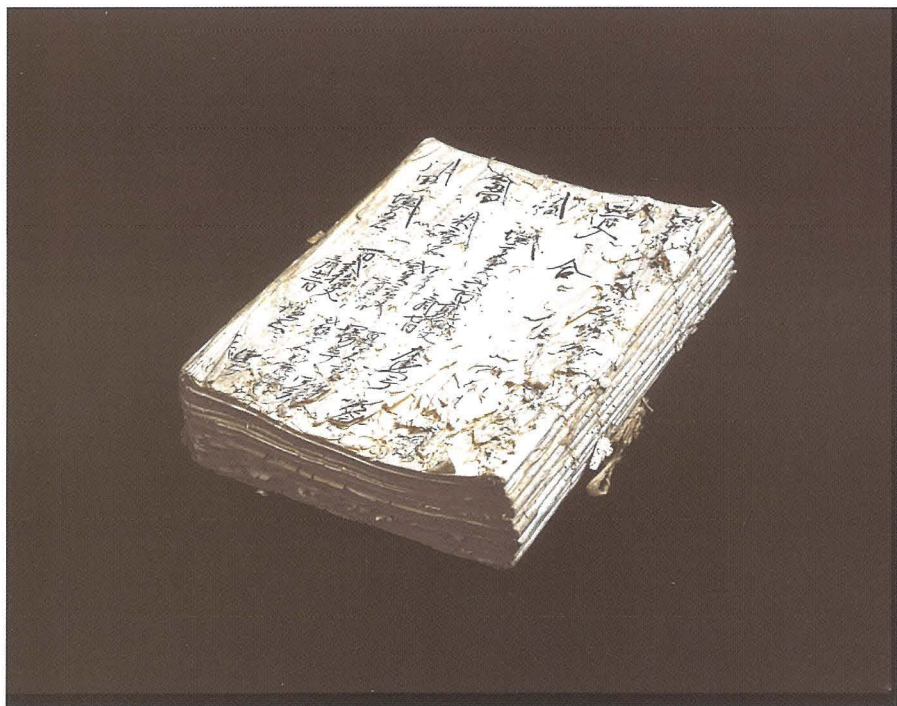
2 吉田南遺跡建物群全景と橋



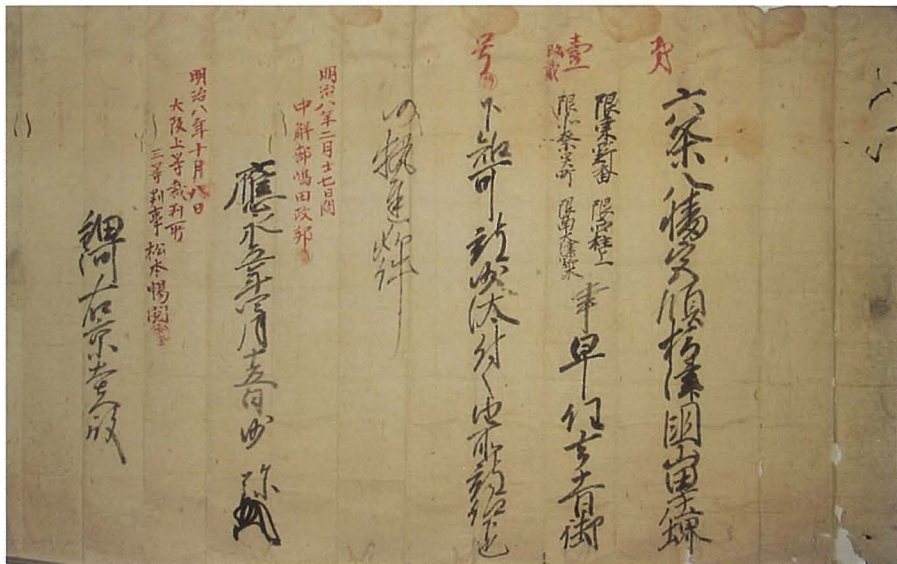
3 滝ノ奥経塚出土品 神戸市教育委員会蔵



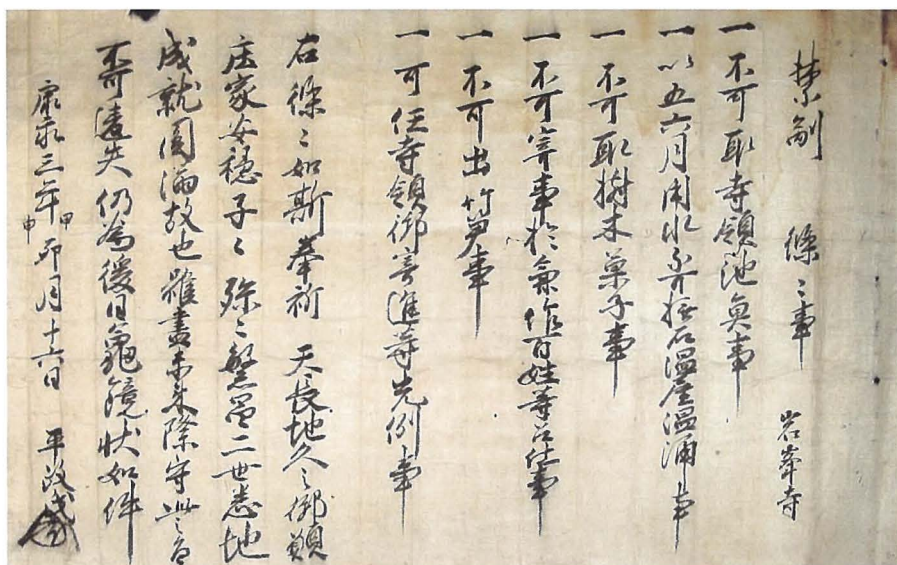
4 祇園遺跡出土 玳瑁天目小碗 神戸市教育委員会蔵



5 兵庫北関入船納帳 京都市歴史資料館蔵



6 応永5年 管領斯波義将施行状 山田出張所旧蔵文書



7 康永3年 平政氏禁制 石峯寺文書



8 丹生山明要寺参詣曼荼羅圖 丹生神社蔵



9 天正8年 羽柴秀吉制札 淡河本町自治会蔵



10 遊行縁起 真光寺蔵



11 十六羅漢圖 第十五尊者 太山寺藏



12 木造菩薩立像 大龍寺藏



13 太山寺本堂



14 箱木家住宅



15 如意寺三重塔

発刊にあたって

このたび『新修神戸市史』歴史編「古代・中世」を刊行する運びとなりました。市史編集事業は市政一〇〇周年記念事業のひとつとして、昭和五十七年に着手し、先人たちのたゆまない努力の足跡をたどり、大いなる遺産を後世に継承して次の百年に向けて飛躍することを願ひ、刊行を続けてまいりました。市史の編集においては、途中阪神・淡路大震災により、やむなく中断するなど困難な時期もありましたが、執筆の先生方をはじめ多くの方々のご尽力により、歴史編、経済編、行政編の計九巻を刊行してまいりました。

今回刊行いたします歴史編「古代・中世」は、古代の大輪田の泊の姿、平清盛による日宋貿易、兵庫津の繁栄など今日の国際貿易港としての礎を築いた時代を取り扱っており、これによりすでに完成しております「自然・考古」「近世」「近代・現代」とあわせ、歴史編が通史として完結いたします。大震災から一五年が経過しましたが、本編では古代・中世における震災を含む自然災害についてもふれております。先人たちが幾多の困難や災害を乗り越えてきた英知を学び、新たな時代を築く一助になれば幸いです。新しい歴史学の成果を取り入れながら、平易で格調ある

『新修神戸市史』が、市民をはじめ多くの歴史愛好者の方々に末長く親しまれることを切に願っております。

本書の刊行にあたり、編集委員長、専門委員、編集委員、執筆者の方々の多大なご尽力に深く感謝申し上げますとともに、数々の資料提供をはじめ編集にご協力いただきました関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成二十二年三月

神戸市長

矢田 立 郎

凡 例

- 一、本巻は「自然・考古」「古代・中世」「近世」「近代・現代」からなる『新修神戸市史』歴史編Ⅱ「古代・中世」にあたる。
- 一、この巻の執筆分担者は、巻末に一覧表で示した。
- 一、本文の叙述は原則として、常用漢字、現代かなづかいを用いた。ただし、歴史的用語、固有名詞、引用文などについては、必ずしもこの原則によっていない。
- 一、本文の叙述は、既存の研究成果に依拠しているが、本書の性格上、基本的に出典を示さず巻末に参考文献の一覧を掲げた。史料などを直接引用した場合（原則として読み下し文に改めた）は本文中に出典を記載した。
- 一、なお、中世の史料で『兵庫県史』（史料編 中世一〜九）からの引用については、たとえば史料編一の場合（『県史』一、「〇〇文書」とした。
- 一、人名の敬称はすべて省略した。
- 一、難訓または誤読のおそれのある漢字は、原則として各節の初出のところで、ふりがなを付した。もとの史料についているものは、原則としてカタカナとした。神戸市内の地名の読みは、基本的には神戸市市民参画推進局区政振興課編『神戸市町名一覧表』（平成二十一年）によった。
- 一、文中の写真、図、表は、それぞれ通し番号を付した。これらの掲載と提供に協力していた関係機関、団体ならびに個人の名称は、原則として巻末に掲げた。
- 一、史料提供・協力者の一覧は巻末に掲げた。

一、本文中の年月日は原則として当時の暦によっており、なおその年にほぼ相当する西暦年を（ ）内に記した。

一、本文および引用されている史料のなかには、当時の差別的表現で記されている部分があるが、差別の歴史を科学的に研究する立場から、本書ではそのまま記述した。

題 字 一元神戸市長 宮崎 辰雄

新修神戸市史 歴史編Ⅱ 古代・中世

目次

第一章	原始社会から倭王権へ	
第一節	古代社会への胎動	二
1	地域区分と考察の視点	二
	六甲山地周辺の水系 銅鐸・拠点集落と銅鏡・古墳	
2	弥生時代の神戸市域	四
	六甲山地の南部 六甲山地の西部 六甲山地の北部	
3	古墳時代の神戸市域	九
	六甲山地の南部 六甲山地の西部 六甲山地の北部	
4	石材・鉄材の変化と倭王権の誕生	一五
	石材を介した交流 大和・河内勢力から倭王権へ	
第二節	倭王権の神戸市域への進出	一八
1	葛城臣・大伴連の盛衰と部民・渡来人の編成	一八

縮見屯倉と億計・弘計王 葛城臣の興亡と倭王権の発展 来自部・山部の再編と

大伴連 二造を通じた地域支配 渡来人の再編と葛城臣・大伴連

2 クニと国造氏 二六

葛城直・荒田直と荒田郡 活田長峽のクニと雄伴のクニ 国造のクニと河内・武

庫のクニ

3 倭直・物部連の盛衰と凡河内国造・明石国造の設置 二五

倭直と六甲山地南部 王権と物部連 明石国造と倭直 凡河内直と凡河内国造

第二章 律令国家の形成と確立

第一節 六〜七世紀中葉の政治過程 二四

1 皇位の継承 二四

継体天皇から欽明天皇へ 敏達天皇から皇極天皇へ

2 有馬温泉への行幸 二五

舒明・孝德天皇の行幸 有馬温泉への道

第二節 大化改新と国の成立 二五

1 律令制の導入過程 二五

「大化の改新」 律令制の導入

2 畿内国と摂津・播磨国 五

「畿内国」と明石の橿淵 摂津国・播磨国の成立

第三節 八・九世紀の政治過程 三

1 八世紀の皇位継承と印南野行幸 三

文武天皇から称徳女帝へ 聖武天皇の印南野行幸 即位直後の行幸 印南野行幸の目的

2 摂津職・摂津国と播磨国 七

摂津職から摂津国へ 摂津国の等級 摂津職の官人 播磨国の等級と国司 摂津・播磨国府

3 九世紀の皇位継承 八

光仁天皇から桓武天皇へ 平城天皇と嵯峨天皇 仁明天皇から醍醐天皇へ

第四節 郡の成立と変質 六

1 六甲山地南部の郡と郷 六

荒田郡の範囲 六甲山地南部の郡の変遷 菟原・雄伴から菟原・八部郡へ

2 六甲山地西部の郡と郷 九

縮見屯倉から志美・高野郷へ 縮見屯倉から住吉・神戸郷へ アカシのクニから明石郡・美囊郡へ 明石郡の郡領氏族の変遷

3 六甲山地北部の郡と郷 九

有馬郡の成立と郡領氏族	有馬郡と武庫郡の日下部宿祢	幡多郷と秦氏	
郡領氏族を中心としていた古代社会の変質	有位者・外散位・雑任の増加		一〇五

第三章 神仏と交通

第一節 神祇信仰の展開		一一〇
-------------	--	-----

1 神祇信仰と官社制度	地域の環境と自然信仰	古代の神祇行政と官社制の成立	神戸と地域社会	一一〇
2 神祇信仰の地域的特色	神戸市域の式内社と地域社会	菟原郡・八部郡の式内社	有馬郡の式内社	一一八
	石郡の式内社		明	
3 神階授与と奉幣	神階授与とその背景	奉幣の固定化と神階	摂津の諸社の昇叙	一二七

第二節 仏教信仰の展開		一三三
-------------	--	-----

1 仏教の伝来と氏寺の造営	仏教を通じた秩序の形成	神戸市域の白鳳寺院	神戸市域周辺の奈良寺院	一三三
2 護国思想の進展と官寺の経済活動				一三九

	官寺と私寺の区別化	定額寺の運営	全国へ進出していく大寺	一四三			
3	大寺の荘園と権門の成立	法隆寺の明石・宇治荘	宇治荘の荒廃と石重名の成立	輪田荘の成立	東大寺の垂水荘	垂水荘の終焉と国衙領の成立	一四四
第三節 陸上交通の歴史と展開							
1	中央集権的な陸上交通システムの構築	一四五					
2	伝馬と駅馬	伝子と駅子	朝使による駅馬・伝馬の利用	一五二			
2	神戸地域の官道と駅家	一五三					
	芦屋駅・須磨駅・明石駅	芦屋駅から明石駅へのルート	一五六				
3	中央集権的な陸上交通システムの崩壊	一六〇					
	四度使による駅馬の利用	貢御使による駅馬の利用	一六〇				
第四節 水上交通の歴史と展開							
1	倭王権の発展と海上交通	一六四					
	倭の五王の外交	住吉大神の鎮座伝承	大阪湾岸の港湾と海洋祭祀	淀川水系と瀬戸内海交通	一六四		
2	敏売浦と外交儀礼	一七三					
	特殊な外交儀礼	神酒と肴の給付	神酒と肴の共食儀礼	小中華思想にもとづく国際意識	敏売崎の位置	機内の最西端の神戸・西摂	一七三

3	中央集権的な水上交通システムの構築	一〇三
	陸運から海運へ 行基による大阪湾交通の整備 造船瀬所による播磨灘交通の整備	
	備 船瀬使の瀬戸内海交通の掌握	
4	中央集権的な水上交通システムの崩壊	一八八
	河尻の発展と淀川北岸の繁栄 難波津から大輪田泊へ 五泊と大輪田泊	
第四章 神戸と災害		
第一節 先史時代の自然災害		
1	災害史の研究方法	一九四
	災害史研究の意義 考古学が明らかにした自然災害	
2	遺跡にみる神戸の自然災害	一九五
	火山災害 水害 地震考古学	
第二節 古代の自然災害		
1	摂津国・播磨国の地震	二〇三
	災害の定義 日本最古の地震記録 有史最古の白鳳南海地震 天平六年の大地震 貞観十年の播磨国大地震 仁和三年の南海地震	
2	摂津・播磨両国の風水害	二二一

最初に記録された摂津の水害 奈良期の摂津・播磨の風水害 平安期の摂津・播磨の風水害

第三節 古代の災害観と災異思想

- 1 古代の災害観…………… 三六
- 自然認識と災害観 古代の災異 頻繁に発生する飢饉・旱魃 疫病の流行とそ
の対策…………… 三六
- 2 古代日本の災異思想…………… 三五
- 災異思想と天子不徳の詔…………… 三五

第五章 貴族政治と平氏の台頭

第一節 純友の乱と摂関政治

- 1 海賊の跳梁…………… 三〇
- 海賊の発生と群党蜂起 承平の海賊問題 純友の登場…………… 三〇
- 2 天慶の内乱…………… 三三
- 純友の蜂起 反乱の背景 戦闘の経緯と乱の終息…………… 三三
- 3 王朝の栄華…………… 三九
- 摂関政治の確立 摂関時代の政争 王朝貴族と神戸…………… 三九

第二節 院政と平氏の台頭……………二四六

1 院政と受領層……………二四六

院政の成立 受領と国の等級 院近臣と播磨守 「最下国」撰津

2 伊勢平氏の発展……………二五四

平正盛の台頭 平氏の西国進出 忠盛の栄達

第三節 清盛と日宋貿易……………二六三

1 武家棟梁清盛……………二六三

保元の乱と播磨守 平治の乱

2 清盛の大輪田進出……………二六八

八部郡の検注 平野の山荘 大輪田泊の修築

3 大輪田の繁栄……………二七五

平氏と日宋貿易 大輪田の宋船 福原の千僧供養

第四節 「平氏政権」の成立……………二八三

1 鹿ヶ谷事件……………二八三

鹿ヶ谷事件の勃発 対立の背景 皇位をめぐる葛藤

2 治承三年政変……………二八九

院政の停止 清盛の政権構想

3 嚴島参詣と福原……………二九四

前大相国藤原忠雅の downward 高倉上皇の嚴島参詣 高倉上皇の福原到着 福原出立と山田山莊・高砂泊 帰路の福原

第六章 福原遷都と源平の争乱

第一節 福原遷都……………三〇八

1 以仁王の挙兵……………三〇八

挙兵の背景 挙兵の鎮圧 遷都の背景と意義 遷都をめぐる軌轢

2 福原遷幸と混乱……………三二八

突然の福原遷幸 輪田京構想の挫折 遷都論の敗北

3 福原京の建設……………三二八

福原遷都と寺社 福原の発展 新造内裏移徙と街路 福原における邸宅

4 遷都とその意義……………三三六

遷都の決断 遷都の背景 軍事独裁体制の構築

第二節 寿永の争乱……………三四六

1 平氏政権の崩壊……………三四六

清盛の最期 宗盛と後白河

2	平氏都落ち	三五〇
	都落ちの背景 福原炎上 平氏の再起	
3	一ノ谷合戦	三五六
	合戦前夜 両軍の衝突 戦闘の経緯 平氏一門の悲劇	
第三節 鎌倉幕府の成立		
1	平氏の滅亡	三六九
	一ノ谷合戦の結果 源義経の活躍 平氏滅亡の原因 平氏の余映	
2	幕府体制の確立	三七九
	義経の没落 梶原景時と播磨 幕府の摂津支配	
3	俊乗房重源	三六七
	東大寺再建 大輪田泊の修築	
第七章 鎌倉時代の社会と文化		
第一節 承久の乱		
1	後鳥羽院政	三五四
	後鳥羽院政の成立 播磨と摂津の守護 歌枕と有馬温泉	
2	後鳥羽院の敗北	四〇一

第二節 莊園公領制の世界 四〇八

1 莊園の分布と概要 四〇八

莊園公領制概観 摂津国菟原郡 摂津国八部郡 摂津国有馬郡 播磨国明石郡 播磨国美囊郡

2 輪田荘の形成と発展 四一八

輪田荘の初見 石重名田畠の寄進 最勝金剛院領輪田荘の成立 輪田荘の危機
的狀況 一円不輪化 預所職の変遷 地頭請所化と領家職相論

3 莊園公領制の諸相 四二六

性海寺と住吉保 伊川上荘の名田相論と太山寺領(その一) 伊川上荘の名田相論と太山寺領(その二)

第三節 流通経済の進展と悪党 四三七

1 兵庫嶋の成立 四三七

流通経済の発展 「兵庫嶋」の初見史料とその意味 兵庫嶋の住人

2 第一期東大寺領兵庫関と悪党 四四二

関領有の変遷 第一期東大寺領兵庫関経営の開始 正和四年悪党事件

3 第二期東大寺領兵庫関と諸勢力 四五〇

日銭徴収権の復活 東大寺領兵庫関の復活と興福寺領福泊関 その後の兵庫関と

	福泊関	
4	東大寺の兵庫関経営	四六〇
	鳴修固 関銭収入と用途	
第四節 中世仏教の展開と変容		
1	平清盛と千僧供養	四六六
	法華経信仰と平氏・後白河上皇 平清盛と閻魔王	
2	顕密諸宗と法華経信仰	四六九
	顕密の寺院と地域社会 温泉と寺院 華嚴宗の性海寺	
3	西大寺叡尊の教化	四七八
	叡尊の授戒活動 モンゴル襲来と異国降伏祈禱 叡尊の摂津・播磨教化	
4	浄土系諸派の展開	四八四
	法然と証空	
5	一遍と時宗の聖	四八六
	一遍の生涯と布教活動 一遍と兵庫 一遍の兵庫没をめぐって 光明福寺の方丈とは誰か 光明福寺について 淡河氏と時宗 一遍の墓を建てたのは誰か 国阿と薬仙寺 時宗薬仙寺の成り立ちをめぐって	

第八章 南北朝の動乱と室町幕府

第一節 鎌倉幕府の滅亡・南北朝内乱期の神戸

1 赤松氏の挙兵…………… 五八

後醍醐天皇の倒幕挙兵 護良親王の活動 円心の摩耶進軍 赤松城・摩耶山城
赤松城はあったのか 摩耶城はどこか

2 南北朝内乱はじまる…………… 五八

建武新政の成立 足利尊氏の離反 足利勢兵庫からの退却 湊川合戦前夜
足利勢の編成 後醍醐方の布陣 正成の本陣 『太平記』と『梅松論』

『太平記』が描く「湊川合戦」 『梅松論』が描く「湊川合戦」 「湊川合戦」
のイメージ 地域にとつての湊川合戦 戦場の訪問者 金谷経氏の蜂起 金
谷勢の本拠淡河・山田の位置 金谷経氏の没落

3 観心の擾乱と西摂津・東播磨地域…………… 五九

足利政権の分裂 打出・御影の合戦 「小清水合戦」か「打出合戦」か 湯山
と芦屋・東神戸を結ぶ道

4 内乱の終息へ…………… 五九

山路荘と内乱 山路荘の半済 楠木正儀の進出と山路城・多田部城

第二節 細川氏と赤松氏…………… 五九

1 摂津国と播磨国の守護…………… 六一

細川氏の惣領家と庶流家 細川氏の摂津支配 赤松氏の惣領家と庶流家 赤松

氏の播磨支配

2 有馬郡守護赤松有馬氏…………… 五六

赤松有馬氏の成立 有馬教夷と「持家」 近習赤松有馬氏 有馬道衍・直祐
道衍の逐電・元家の復権と誅殺 御供衆有馬則秀 有馬慶寿丸の惣領家家督就任
有馬氏被官の澄則擁立 久留米有馬氏系図 赤松有馬氏嫡流の復原

3 嘉吉の乱と西撰・東播…………… 五七

赤松満祐下国事件 足利義教の強権政治 嘉吉の乱の始まり 追討軍の派遣と
兵庫の合戦 播磨東三郡の支配 赤松満政の乱と有馬郡 赤松則尚の播磨進攻
と有馬元家 赤松惣領家の再興

4 応仁・文明の乱と撰津…………… 五六

応仁・文明の乱の始まり 赤松氏の播磨回復 大内政弘の上洛と撰津の国人
兵庫津の焼亡 大乱の終結 乱後の動向 撰津国寺社本所領の書上げ 將軍
権力の分裂

第九章 兵庫津と莊園

第一節 兵庫津の発展と兵庫北関…………… 五六

1 南北朝・室町期の兵庫…………… 五六

兵庫関の領有関係 物資集散地としての兵庫 日明貿易の開始と兵庫 朝鮮使
節と琉球商人 日明貿易の断絶と復活

	2	「兵庫北関入船納帳」の史料性格	六九
		注目される史料、「入船納帳」 燈心文庫「入船納帳」発見の経緯 文安二年分の兵庫入港船数の推定 文安二年の史料が残された意味 「入船納帳」に記載された諸データ 「入船納帳」の船籍地 神戸地域の船籍地	
	3	船籍地と兵庫との結びつき	六三
		「入船納帳」にみる主な積載物品 主な物品を運んだ船の所属地の特徴 兵庫と結びついていた港町	
	4	十五世紀中葉の兵庫津とその住人	六三
		「入船納帳」にみる兵庫津の住人 近世兵庫津絵図から中世を探る 慶長の裁許絵図に描かれた兵庫津と陸上交通 兵庫津遺跡への期待 「入船納帳」と瀬戸内流通	
	5	応仁・文明の乱以後の兵庫津	六五
		兵庫経由の年貢米輸送 旅の事例 内海航路の要港兵庫津 南関の復活と庄主藤春房高隆 藤春房と赤松氏 月俸銭をめぐる訴訟 南北両関の終焉 兵庫津の白髭番匠	
第二節 荘園・村・町			
	1	赤松七条家と撰津輪田荘・福原荘	六五
		領家職相論以後の輪田荘 港の荘園・福原荘と赤松氏 湯起請裁判 嘉吉の乱と七条赤松氏 七条赤松氏の知行没収 輪田荘東方の代官請負 応仁の乱後の福原荘と一条家	

2	伊川荘と明石光長……………	六八三
	国人明石氏 大光明寺領伊川荘の成立 伊川荘と赤松春日部家 伊川荘代官職をめぐる争い 明石光長の代官職回復運動 在田小二郎の二カ村押領……………	
3	赤松有馬氏と有馬郡内の荘園……………	六九〇
	醍醐寺領野鞍荘 郡内荘園の一括請負 南御所領上津畑代官職 上津畑代官職のその後 内上荘と有馬四郎……………	
4	山田荘と淡河荘……………	六九四
	山田・淡河両荘の山境相論 作和谷をめぐる相論 山田荘の反攻行動 山田荘の村々 村の神社・村のお堂 年寄・若衆・村有田 山田荘十三カ村の成立……………	
5	細田村と性海寺の山相論……………	七〇三
	文明二年の相論 文明年間の展開 明石氏と守護 永正十二年明石則行の裁定 衣笠氏と射庭谷池の築造……………	
6	都賀荘と山路荘・本庄……………	七一一
	「天城文書」と都賀荘 荘園と番・名 若林氏と都賀荘の土豪 土豪の実態 都賀荘の惣荘 惣荘の組織と機能 都賀荘の寺庵 都賀荘の惣村 室町時代の山路荘 武家勢力の浸透 「本庄」について 山路荘・本庄の土豪 山路荘・本庄の惣村・惣荘……………	
7	有馬温泉の賑わい……………	七四七
	湯山を訪れた人びと 湯山への道 湯山街道と関 入湯三七日 湯山の町と寺社 鼓滝・鎌倉谷 湯山に暮らす人びと 湯山みやげと挽物細工……………	

第十章 戦国の争乱と中世後期の文化・社会

第一節 戦国の争乱

1	細川京兆家の分裂抗争と西撰地域	七四
	撰津下郡 守護細川京兆家 細川京兆家の分裂抗争 河原林正頼と灘五郷	
	細川澄元の挙兵 下郡国人衆の動向 細川澄元の畿内再進攻 細川高国・晴元	
	の抗争 一向一揆の猖獗と難太合戦	
2	三好氏支配下の西撰・東播地域	七六
	三好長慶の越水入城 長慶、晴元を降す 三好氏支配の新しさ 松永久秀と滝山城 滝山千句 兵庫津の正直屋極井家 本庄と芦屋荘の山相論 近世以後の相論 東播磨への進出 滝山城をめぐる攻防 山田荘原野の栗花落家 上谷上の板屋家 白川畑の藤田家 白川畑の惣中 村落上層の行方	
3	三木合戦と西撰・東播地域	八〇
	別所氏の撰津進出 三木合戦と西撰・東播の国衆 端谷城出土の甲冑 荒木村重の離反 淡河・丹生山合戦 淡河氏のこと 三木城千殺し 三木・有岡合戦後の新たな支配体制 播磨の城破り 有馬則頼の淡河入部 有馬氏のこと 有馬氏の有馬郡支配 有馬氏の家中 有馬氏の庶流 有馬重則・則頼 南蛮人文絵鞍	
4	楽市制札と淡河地域	八三
	再発見された制札 唯一の秀吉楽市制札 制札の外形的特徴 三木合戦と制札の伝来 天正七年制札の内容 天正八年制札の内容 楽市制札の意義	

第二節 南北朝・室町時代の仏教…………… 八四七

1 大陸との往来と兵庫津の禅院…………… 八四七

無本覺心と宝満寺 明極楚俊と後醍醐天皇 福嚴寺と仏燈派の禅僧 兵庫津と

大陸文化 禅昌寺と一切経

2 有馬の禅宗・律宗…………… 八五五

温泉と寺院 瑞溪周鳳の温泉行記

3 顕密諸宗と修験…………… 八六〇

顕密寺院と武力 顕密寺院と地域社会 戦国期の顕密寺院

4 浄土真宗と法華宗…………… 八六四

蓮如と摂津 日隆と港湾都市

第三節 自然災害と社会…………… 八六六

1 相次ぐ大地震…………… 八六六

中世の南海地震 応永十三年の地震

2 中世の風水害…………… 八七二

文明七年の高潮 弘治三年の高潮

3 六甲山系の山津波伝承と土砂災害…………… 八七六

永正元年の水害（慈明寺流れの伝承） 永正十四年の水害（鳴滝明神流出）

4 災害文化の形成と継承に向けて…………… 八〇

第十一章 古代・中世の文化財

第一節 古代・中世の美術…………… 八二

1 奈良・平安時代の美術…………… 八二

平安時代以前 平安時代の美術 平安時代の絵画

2 鎌倉・室町時代の美術…………… 八五

鎌倉の美術 太山寺の美術 福祥寺(須磨寺)の美術 有馬の美術 鎌倉末期以後 石造美術

3 阪神・淡路大震災と文化財…………… 九三

震災と文化財

第二節 古代・中世の建築…………… 九五

如意寺…………… 九六

阿弥陀堂(常行堂)〔重要文化財〕 三重塔〔重要文化財〕 文殊堂〔重要文化財〕

太山寺…………… 九四

本堂〔国宝〕 一間春日厨子 仁王門〔重要文化財〕 安養院庭園〔名勝〕

石峯寺	九三
藥師堂〔重要文化財〕	三重塔〔重要文化財〕
福祥寺〔須磨寺〕	九六
宮殿と仏壇〔重要文化財〕	九四
徳光院	九四
多宝塔〔重要文化財〕	九四
南僧尾観音堂	九四
観音堂〔県指定重要文化財〕	地藏堂
若王子神社	九四
本殿〔重要文化財〕	九四
六条八幡神社	九五
三重塔〔重要文化財〕	九五
豊歳神社	九五
本殿〔重要文化財〕	九五
宗賢神社	九五
本殿〔県指定重要文化財〕	九五
箱木家住宅〔重要文化財〕	九六
主屋	離座敷

第三節 遺跡……………九六八

1 六甲山南麓の遺跡……………九六八

深江北町遺跡 郡家遺跡 住吉宮町遺跡 滝ノ奥遺跡 日暮遺跡 下山手

北遺跡 祇園遺跡・神戸大学医学部附属病院構内遺跡 兵庫津遺跡 上沢遺跡

御蔵遺跡 神楽遺跡 二葉町遺跡 大田町遺跡

2 明石川流域とその周辺地域の遺跡……………九六七

垂水日向遺跡 二ツ屋遺跡 日輪寺遺跡 頭高山遺跡 白水遺跡 寒鳳遺跡

跡 吉田南遺跡 玉津田中遺跡 端谷城跡 神出古窯址群

3 六甲山土地北部地域の遺跡……………一〇〇三

宅原遺跡 下小名田遺跡 上小名田遺跡 淡河・萩原城跡 勝雄遺跡 箱

塚 木家住宅（千年家） 湯山遺跡（豊臣秀吉湯山御殿跡） 石峯寺経塚 勝雄経

〔巻末付録〕

執筆者一覧

編集協力者

写真・図・表一覧

参考文献目録